

「バーの扉」* ススキノ編・序編 —Fictions/Possible another worlds—

札幌市医師会
華岡青洲記念病院

はなおか けいいち
華岡 慶一

地元札幌での「循環器研究会」から流れた店（ススキノ）での話。酒も容量依存的に効き始め、気持ち良く（自分の想像界で）“Honesty”を熱唱していたら、近くに座っていた心臓血管外科医が「先生はどういった意図であのようなエッセイを北海道医報に書かれているのですか？」と聞く。さらに、意外にも（おそらくお世辞で）「読んで面白いとは感じましたが、他の記事と比較して内容が風変わりなので聞いてみたいと思っていました」と言う。私にとって、北海道医報（「会員のひろば」に限ったことだが）に投稿することに特別な意図はない。執筆依頼を受けて書いてみたら意外と居心地が良かったので、たびたび投稿している。強いて動機めいたことを挙げるなら「想定される読者の環境と受けた教育に多少馴染みがある」ことや「知的水準が一般より高い（文章リテラシーの観点で）と予想されるところで『好きなこと』を書いてみたい」くらいか……。正直、「自分が書くもの（書きたいもの）」と「他の記事」とのバランスは、考えたことはない（決して読まないわけではない）。

投稿規定に従って、特定個人を中傷することを避け、モチーフを抽象化して、フィクション・クレジットを入れて作ったプロットを思いのままに書いてきた。多少の毒舌は許してもらっている（と勝手に思っている）。私は、昔から「模範課題感想文調子」・「この本を読んで学んだことを生かして——みんなのことを考えて、世の中の役に立てるように——私にできることを頑張りたいと思います」的なレトリックに遭遇すると、気恥ずかしくてムズムズするほうだ。過去には、「現国試験問題」で——偏差値のために、原典作者や試験出題者の国語力を押し量って——意にそぐわない選択肢を選んだこともある。うまくいく時もあるが、大体は両者の過大／過少評価で馬鹿げたミスになった。私には、ChatGPTのような書き振り（模範解答）は、苦手だし向いていない。だが（だからこそ）最近、「中二病的語彙」を駆使して、「高二病的葛藤」を意のままに（ChatGPTに対抗して）書いている。それを（酔った頭で）思い出しながら前述の質問者の先生にこう答えた。「強いて、『意図』というものを言葉にするなら、これまで関わってきた人たちに、私がどういう価値観を持って判断するかを表明したかった（「正の引き寄せ効果」のために）。それが「周りを巻き込んで仕事をする（価値判断／行動決定する）者の礼儀」と申し上げたら、「……なるほど」と納得していた（ようだった……）。

酔っていたとはいえ、格好つけてそんなことを言ってしまったことや、また「会員のひろば」の6月号（2022）で、“When I’m sixty-four”『64歳

になったら』と宣言したこともあり、4か月ぶりに10月号（64歳誕生日）から成人編を再開した。だが、最近では、「会員のひろば」の投稿数が増加しているようで（人気コーナーなのだ！）連月順次投稿では、連続で載せてもらえない。そこで「バーの扉」ススキノ編は、書き上げた順に投稿して「どこかの月（号）でお目にかかれれば」と考えた……。

*

それは、ある年の瀬の、金曜日のことだ。その日の最後に、僕は、ある「バー」から人生何回目かの「出禁」を食らう羽目になった（気がした……、はずだ……、多分……）。

その日は17時からウェブ会議があった。専門領域の重鎮が集まるクローズドの会で、いつも講演が一つ用意されている。その回は、個人的にも面識のある研究者の話なので、ウェブ参加の意思を伝えていた。時期的に、少人数の会合が続いていて心も体も疲れていた。その日は、憂鬱なテーマの院内会議も並行していたので、講演が終わったら早く退出しようと思っていた。

発表の内容は——演者の性格（ハビトゥス）を反映して、心地よく聞けた。しかし、質疑応答で、ある重鎮の外連味の効いた発言に当たった。自分の仕事に引き寄せすぎた「コメント」にやられた。重鎮は決して嫌な人物ではない。また、問題発言をしたわけでもない。ましてや彼の言語化の手法が特殊（コミュ障／ADHD／発達障害）なのでは決してない。この業界でもADHD疑いは多い（自分の過去も含めてだが）——彼らの特徴は、自分の興味の対象を延々喋り続ける（拡散的に）ことだ。一方、重鎮は極めて冷静に論理展開していた。その日は、私の方に問題があっただけだ。その日の私の心は岩のように「ゴツゴツ」していた。気の滅入る出来事が続くと、心はしなやかなさを失い、収縮して固くなる。その日は、無性に「状況を取り戻せないか（改善したい）」と思った。それまでの人生を振り返っても、そんな時にそんな事（「バーの扉」を開けること）が上手くいくことは稀であること（むしろ悪化することさえある）はわかっていたが、その時は無性に飲みたくなった。私の苦手な人間は、「想像力（ファンタジー）を欠いた人間」とは、すでに述べた。だがこういった時は、何より自分自身の「想像力」が低下している。自分自身が、自分の「嫌いな人間（象徴秩序の奴隷）」そのものになっている。そんな時は、本来豊かに詰め込まれているはずだった体の内部は萎縮して空っぽになり、T・S・エリオットの『The Hollow Men』のように虚ろな脳が「藁クズ」で埋め尽くされている。そんな時は、空虚な言葉で自分を繕い、他人を説教してはならない。また、自分自身の空虚に気づいても、それを教師のせいや、土地のせいにはいけない。何よりそれは、自分の能力や努力によって熟成されるべきものだから。

そう、そんなことは、とっくに気づいて解っていたはずなのに……。

結局、私は「バーの扉」をある自的で使うのだが、この続きは次編で。